

—— 学会の沿革 ——

老年歯科医学を発展させた長尾正憲理事長の足跡

President Masahiro Nagao's Best Contributions to Development of Gerodontology

下山 和弘^{1,2)}

Kazuhiro Shimoyama^{1,2)}

長尾正憲先生は渡邊郁馬先生の後任として、1996年4月より1998年3月までの2年間、日本老年歯科医学会の理事長として優れた手腕を発揮し、日本老年歯科医学会の発展に尽くされました。役員としては、総務担当理事には石川達也先生、渡邊郁馬先生、稲葉 繁先生、会計担当理事には長谷川絃司先生、山根 瞳先生、下山和弘、庶務担当理事には山根源之先生、早川 巖先生、編集担当理事には高江洲義矩先生、眞木吉信先生、那須郁夫先生、学術大会担当理事には稲葉 繁先生、医療制度担当理事には新庄文明先生、渉外担当理事には森本 基先生、荒川 明先生、教育担当理事には長尾正憲先生、学術用語担当理事には上田 裕先生が就任されました。

長尾先生は1986年9月に設立された日本老年歯科医学研究会の設立当初からの会員であり、理事長就任前には総務担当理事および教育担当理事として学会運営に携わっておられました。また、1991年11月には大会長として第2回日本老年歯科医学会総会・学術大会を横浜で開催されました。この大会は第17回日本老年学会と同一日程、同一会場で開催され、このときの日本老年学会総会で日本老年学会の分科会として日本老年歯科医学会が正式に承認されたことで、記憶に残る大会となりました。

先生は数々の活動を通して得られた経験を活かし、理事長として職責を果たされました。「老年歯



図1 長尾正憲先生（理事長在任時のお写真）

科医学」第11巻第1号（1996年7月発行）の巻頭言「日本老年歯科医学会理事長に就任して」において、「自己点検・評価を行い、本学会のあるべき姿と更なる充実、発展の足がかりを見出すべき時期にあると思う」と書かれています。渡邊郁馬前理事長から引き継がれた長尾理事長は、目配り・気配り・心配りによってさらなる発展を目指して活躍されました（図1）。

長尾先生が理事長就任にあたって最初に取り組まれたのは事務局の委託でした。それまでの事務局は東京都老人医療センター歯科口腔外科に置かれており、渡邊郁馬前理事長のご尽力により日本老年歯科医学会が運営されていました。会員の増加、学会活動の活発化などのために、長尾先生は理事長就任とともに事務局を一世出版株式会社に委託することにしました。これによって、理事・評議員の先生方の負担を軽減するとともに学会活動がより円滑に行えるようになりました。その後、2005年4月に事務局が一世出版から財団法人口腔保健協会に引き継がれ、現在にいたっています。

¹⁾ 日本老年歯科医学会副理事長

²⁾ 東京医科歯科大学歯学部

¹⁾ Vice-president, Japanese Society of Gerodontology

²⁾ Faculty of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University

会員数の増加の重要性はいつの時代にもいわれております。会員数の増加は活発な学会活動のためには必須のことであり、財政の安定化にもつながるものでした。財政規模が小さかった当時の学会では、「節約」の二文字は忘れてはならないものでした。会員数は1996年6月17日現在で1,425名、1998年6月19日現在では1,650名と報告されております。長尾理事長は会員数の増加に取り組まれましたが、200名以上の会員の増加は魅力ある学会の証であり、財政の安定化につながりました。また、1997年度からは学会の財政基盤を確固たるものにすべく「運営基金」を設立しました。運営基金の設立によって将来への飛躍のための資金を確保することができました。

学術大会は学会活動の中心をなすものです。長尾理事長は円滑な大会運営、財政的基盤の確保などのために尽力されました。1996年9月28日、29日には岩久正明先生（新潟大学）が大会長となり、新潟県民会館で第7回学術大会が開催されました（図2、3）。第7回学術大会では、新しい試みとして、平成8年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公開発表（B）」の補助を受け、2日目の特別講演2題とシンポジウムを「市民フォーラム・長寿社会と口腔保健」として広く一般市民に無料で開放し、多数の市民の参加を得ました。1997年6月18～20日には渡邊郁馬先生（東京都老人医療センター）が大会長となり、東京国際フォーラムで第8回学術大会が開催されました（図4）。長尾先生が大会長をされた第2回学術大会では初めて日本老年学会総会と同一日程、同一会場での開催となりましたが、それからは隔年で開催される日本老年学会総会に分科会として参加することになりました。第8回学術大会は日本老年学会の分科会として開催されており、会場の確保、大会予算や運営の困難さは現在も当時とは変わっておらず、渡邊郁馬大会長、高江洲義矩準備委員長による準備・運営は並大抵の苦勞ではないことを理解したうえで、先生は理事長として尽力されておりました。また、東京国際フォーラムはオープンしたばかりであり、会場間の移動経路の複雑さが話題となりました。

学会誌「老年歯科医学」は順調に發展していましたが、老年歯科医学の用語の混乱が問題となること



図2 第7回学術大会での口頭発表
（新潟県民会館、1996年）

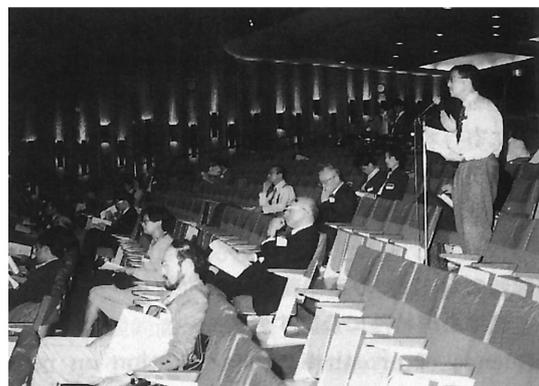


図3 第7回学術大会での質疑応答



図4 第20回日本老年学会シンポジウム
「長寿社会におけるライフスタイル」
（東京国際フォーラム、1997年）

がありました。1994年に発足した用語委員会では委員長の上田 裕先生（大阪歯科大学）が中心となり検討が行われ、約580語からなる老年歯科医学用語集が「老年歯科医学」第12巻第3号（1998年3月発行）に掲載されました。この用語集をさらに発

展させて老年歯科医学用語辞典第1版（2008年3月発行）、老年歯科医学用語辞典第2版（2016年3月発行）が制作されたことは周知のことです。長尾理事長は用語集の作成・公表を重要視されており、理事長の任期内に公表できたことを喜ばれていました。

長尾先生は1998年3月に理事長を退き、また東京医科歯科大学を退官されました。1984年8月に歯科補綴学第三講座の教授、1989年5月に高齢者

歯科学講座の初代教授となられ、東京医科歯科大学においても多くの業績を残されました。東京医科歯科大学で多忙な日々を送りながら、1996年4月から1998年3月まで理事長として老年歯科医学の発展に尽くされ、多くの業績を残されたことを会員一同感謝いたしております。また、これまでと変わることなく適切なアドバイス・温かい励ましの言葉をいただければ幸甚です。